

文部時報

昭和五十五年二月
第一二三三号

特集 中国との教育・学術・文化交流

国際化時代とわが国の教育

平塚 益徳

4

▽座談会

中国との教育・学術・文化交流を

今後どのように進めるか

8

(出席者)

坂本 是忠・橘高 知義・黒羽 亮一・

天城 勲・八司会▽篠澤 公平

中国の教育を考える

青井 和夫

24

日中間の学術交流について

久松 敬弘

30

▽解説

中国政府派遣留学生の受入れ

学術国際局ユネスコ国際部留学生課

39

▽現地報告

中国における留学生生活

村松 君雄

50



▽資料

学生・生徒等の海外研修等に対する指導について

学術国際局ユネスコ国際部企画連絡課

54

随想

中華人民共和国を訪問して

井内慶次郎

36

連載第七回

言葉のはなし——言葉づかい——

野元 菊雄

88

大学の国際化にむけて

宮内 盈義

74

地域社会と生涯教育

伊藤 正己

55

●地域文化施設めぐり⑨

新潟市音楽文化会館

栗本 一男

70

●外国だより

公立義務教育諸学校及び公立高等学校

校教職員定数の改善について

初等中等教育局財務課

83

父兄が支出した教育費

大臣官房調査統計課

84

●表紙絵創作ノート

文化財 ●金銅龍頭

(三輪嘉六)

87

絵 画 ●中村岳陵

気球揚る

(岩崎吉一)

表紙・カット 赤羽根秀一



地域社会と生涯教育

前東京大学教授・中央教育審議会委員
最高裁判所判事

伊藤正己

三つの時代的要請

このごろ「地方の時代」、「文化の時代」という言葉がよく使われます。また、これはまだあまり言われないのですが、これから言われるのではないかと思われるものとして、「教育の時代」という言葉があります。地域社会にありまして、教育、文化の問題に携わっておられます皆さんにとっては、わが意を得たり、というふうに思われているかと思えます。

もともと、逆に考えますと、すぐに喜ぶわけにはいかないもので、こういうことが言われるのは、それらが今まであまり重視されていなかったことにもなります。いずれにしてもこれからは地方の問題、文化の問題、教育の問題が、日本の重

要な課題になってくると申せるのではないかと思います。

地方の時代

そこで、本論に入る前に、そのことをちょっと考えてみますと、第一に、地方の時代と言われるようになってきた、ということがあります。日本では、戦前から地方自治というのが、憲法には書いてありませんけれども、強く主張されてまいりました。とくに市町村の段階の地方自治が、日本においては明治以来重視されてきたのではないかと思います。日本国憲法は、ご承知の通り、地方自治にとくに一章を設けて、地方自治を重視するということから、住民自治とか団体自治というものが保障されてきていると思うのですが、そ

いう法律的な保障を別にして、これまでは実態はどうかということになり、三割自治であるとか言われますように、やはりこれまでは中央重視であったような気がするわけであり、東京中心であったような気がするわけです。それがこのごろのように、住民の要求が非常に多様化してくると、国ではどうしても対応できないというところから、地方というものが見直されてきているといえるように思います。地方制度調査会の答申でも、改めて従来いわれていたような地方分権ということが強調されているのも、その趣旨であると思います。

教育とか文化の側面におきましても、やはりかつては東京中心が目立ったのではないのでしょうか。私なども旧制の中学までは地方にいましたが、東京に出てきて東京にずっと住んでおりまして、東京は非常に便利なところだと思います。

そういう従来の東京中心の、広く教育とか文化とかを含めた文教の政策を、やはり見直すべき時期が来ていると思うわけですね。大学などもことにそうだと思いますが、ご承知の通り、私立大学は、やはりなんといっても大都市、ことに東京に集中している状況です。この点が、地方のみならず、関西方面からいろいろな苦情が出るわけであり、

ともかく、大学、美術館、博物館などが東京中心であったことは事実ではないかと思えます。しかし、最近これが、い

わば地方の時代ということ、見直しが行われていることは確かであろうと思います。美術館、博物館、スポーツ施設などが地域社会に次々と作られ、また企画をされているようでもあります。国立大学も、地方の国立大学の整備が進められていることもご承知の通りでございます。

これは文教行政と直接かわり合いがございませんが、マスコミなどを見ておきますと、たとえば放送などでも、ローカル放送の重視ということがいわれておりまして、NHKなども、ローカル放送を抜きにしては今後のNHKは視聴者に受け入れられないのではないか、ということも言っています。新聞なども、地方紙が広く読まれており、全国紙は地方版を充実しないと地方紙に負けるわけでありまして、地方版を重視する傾向にあります。

そういうふうな、あらゆる面で地方というものが見直されている。ことに教育、文化の面での見直しといったものが行われているのではないかと思います。

文化の時代

その次に、文化の時代ということは、説明するまでもないのであります。戦後の日本では、これまで何といっても経済成長政策が重視され、物質的な豊かさというものを達成するというのが、最大の国家目的であったように思います。そ

れが最近に至って心の豊かさといえますか、精神的な豊かさを見直していかなければならない、ということになってまいりました。

もちろん、文化というのは、本来個人の自発性にゆだねる問題であり、あるいは少なくとも民間が指導力を持つべきものであって、国とか地方公共団体といった公権力が入り込むのはどうか、という考え方もございます。しかし現在では、そうはいっても文化の問題について、国や地方自治体の保護、育成を抜きにしては考えられないのではないだろうかと思われ、そういう意味では、これからの文教行政の中での文化に占める位置が強まってくるのではないかと思えます。

最近、朝日新聞で、桑原武夫先生が「文化力」という言葉を書かれておりまして、非常におもしろく思ったんですが、国際社会で、ある国が指導力を持つていくためには、まず政治力、あるいは経済力があることは必要だけれども、それにプラスして文化力というものがなければならぬのではないだろうか、というご指摘がございました。文化力というのは初めて聞いた言葉でございますが、非常にもしろい言葉ではないかと思えます。

そういう面から見ると、日本は非常に立ち遅れている、というご指摘でございます。日本はいろんな文化を持っており

ながら、国際社会においては文化力といえるほどのものを持っていないといえます。政治力のほうはまだあんまり強くないようですが、経済力は非常に大きい。しかし、これからはやはり文化力というようなものを、日本が強めていくことが必要ではないだろうかと考えられます。

芸術とか学問とかの領域におきましても、日本は外国のものを学ぶことは多く、また日本人は外国のことを非常によく知っております。外国へ行きますと、われわれが接触する限りにおいては、日本人と会ってみようという人はわりに親日家、知日家が多いものですから、案外日本のことをよく知っているという印象を持ちがちですが、一般の人は日本のことはよく知らない。ある調査によれば、日本の首府は北京だと思っている人が外国にはかなり多い、というような状況でありますから、そういった、いわば国に関する情報、知識のアンバランスといえます。不均衡が非常に目立っているように思うわけです。

これもいま、国際的な問題になっていることはご承知の通りで、ユネスコのマスメディアの問題に対する検討で、主として開発途上国側がそのような情報の不均衡は困るということは、国連などでも大きな問題になってくると思われるのですが、日本も、経済力では第一流であるけれども、文化あるいは情報についてはきわめて不均衡な状態に置かれているの

ではないか。日本人は外国のことをたくさん知り、外国の情報ほとんど入って来るにもかかわらず、欧米先進諸国には日本のことはあまり知られていない。これを何とかしなければならぬ、という指摘があるわけです。そういう点から見ますと、桑原先生の言葉で言えば、文化力を強めることが日本の国内はもとより、国際的にも要求されてくるのではないかとというのが私の感じでございます。

教育の時代

第三は教育の時代ということです。これはあまり言われておりませんし、こんなことを特に言う必要はないではないかという方もいらっしゃるかもしれません。確かに、日本は教育について、明治以来非常に大きな努力をしまいいりました。日本の近代化にとって、教育の果たした役割は非常に大きいことは、指摘するまでもないわけです。

話がそれますが、国連大学の本部が東京に置かれまして、日本が多額の金を出しています。国連大学はいろいろな活動しているようですが、どうも一般の方の関心が非常に薄いのであります。一般の方のみならず、日本の学界もまた国連大学にあまり積極的な協力がありません。学術審議会に国際学術交流特別委員会というのがあります。これは別に国連大学のことだけを検討するのではなくて、中国との学術交

流、あるいは東南アジアなど、開発途上国の地域研究の促進を取り上げられているのですが、最初に国連大学との関係を取り上げまして、なんとか日本の学界も国連大学と協力できるものはしたらどうだろうということになりました。いま科学研究費をもらって仕事を進めているのですが、国連大学はだいたいの開発途上国に役立つような学問研究をやっており、その一つの課題に、「人間と社会の開発」というテーマを取り上げております。

たまたま日本人であります武者小路さんが副学長でこのテーマの担当者でございまして、武者小路さんなどと接触しながら、日本の学界として、人間と社会の開発、そしてしかも途上国に役立つような研究として何ができるかという観点でいくつかの問題を取り上げたのですが、第一に取り上げたのが教育の問題です。明治以来の教育の発展という日本の経験を知らせることが、やはり途上国にとっては非常に役立つのではないかとということで、いま検討をしております。

それほど教育は、日本の明治以来の中心的な課題であり、またそれが成功したと思われるわけですが、したがって教育の時代という必要はないのではないかとはいえますが、私は必ずしもそうではないと思います。

と申しますのは、教育といいますと、日本は学校教育が中心でありまして、明治以来、教育の発展は学校教育の発展で

あったように思うのであります。日本で教育といえば学校教育だと考えられているわけであります。またそれももっともなような状況です。

しかし、そのために学校教育以外の教育は、これまでわりあい軽視されていたのではないか。これは実情を知らないもので、皆さんからは、そうではないという反論があるかもしれませんが、私は端的に見てそういう感じがするわけです。これからの教育は、学校教育はもちろん含みますけれども、広く生涯教育というものが重視されてくるのではないだろうか。そういう意味では、教育の時代というものが、広い意味での教育を考えた場合には、キャッチフレーズとして叫ばれて決して悪くはない、と私は思うわけです。

その意味で、文教行政は、これから以上の三つの時代の要求、地方の時代、文化の時代、教育の時代というものにこたえて行く必要があると思うわけでございます。

前期の中央教育審議会は、一つのテーマとして、地域社会と文化という問題を取り上げて答申をいたしました。これは、地方の時代、文化の時代の要求をまとめて考えてみたものであります。

この地域社会と文化についての答申の内容はここでは省略いたしますが、その検討の過程において問題になったのは、地域社会における文化を考える場合に、全面的にはありま

せんが、かなりの部分が生涯教育と重なり合うのではないかとということでした。文化という側面を考えていくと、どうしても生涯教育の問題とぶつかってくる。そこで、生涯教育の問題を考えるべきだ、ということでもございました。

ご承知の通り、生涯教育の問題も前期の中央教育審議会の重要なテーマでございましたが、なんといっても時間が十分ございませんで、結局小委員会報告ということで終わりました。そして現在第十二期中教審の検討すべきテーマとして、これから審議が行われるわけです。

生涯教育はあとでもちょっとふれますように、地域社会の問題だけではないと思いますが、私は、生涯教育の問題は国全体として対処すべき部分よりも、地域社会で対応していかなければならない問題が多いのではないかと、いうふうに思っています。

生涯教育の意義

ちょっと前置きに時間をとってしまいましたが、地域社会と生涯教育の問題に入らせていただきます。

生涯教育とは何かは、論議のあるところですが、私は非常に簡単素朴なのですが、生涯教育というのは、だれでもその意欲と能力を持つ限り、どこでも、いつでも受けられる教育ではないかと考えております。年齢の違い、あるいは職業と

か社会的な地位の違いとか、いっさいの違いにかかわらず、いつでもどこでも受けられる教育ということになるかと思えます。

この問題はご承知の通り、ユネスコあるいはOECDなども検討しております。開発途上国のほうは、学校教育に重点を置いていますが、先進国ではどこでも、学校教育を含めての生涯教育というものがこれからの課題になっているようなことを、ユネスコやOECDの議論からうかがうことができるわけでございます。

生涯教育が重要な問題になってきた背景についても多くの議論がなされていますが、ここではそういう問題は省略させていただきます、私は以下の時間において、生涯教育を考える場合にどういふ問題があるかを、多少まとまりがつかないかもしれないませんが、いくつかあげながらお話しをしてみたいと思います。

教育の統合・体系化

第一は、生涯教育が教育というものを統合し、体系づける役割を担うのではないかとということであります。従来の学校教育を考えますと、学校教育自体としては非常に体系化されていると思います。体系化されすぎているんじゃないかという人もおります。

生涯教育はこのような、いわば学校教育だけで教育は終わりというのではなくて、教育全体を家庭教育、学校教育、社会教育を含めて、そしてそれを統合させる役割を担わなければならぬし、また担うことができるものであると思います。そういうものを担わなければ、生涯教育は成功しないのではないだろうかという気がするわけです。

すでにご承知の通り、このような学校教育、しかも今申しましたように社会に出る前の学校教育で教育が完成するという考え方は、あるいは完成といえるかどうか分かりませんが、ともかく準備はそこで終えて社会に送り出すのが教育だという考え方は、次々と現在崩れつつあるといつてよい現象が見られるように思います。

これは学校教育の範囲ではございますけれども、専修学校ができ、各種学校であったもののうち専修学校として位置づけられるものが出てきました。そして、専修学校の方々に聞いてみますと、それは非常に一般国民の要望を満たしている。専修学校は確かに学校教育法の中には書かれておりますが、従来の整備された体系からはずれた学校ではないかと思えます。そういう各種学校とか専修学校というものが社会のニーズを満たしている。そして希望者が多くなっており、ますます増えつつあるというのは、やはり従来の伝統的な学校だけでは現在の教育への要求は満たしていないという証拠に

昔の学校体系は、かなり複線的なものであったのですが、戦後、六・三制は学校体系を単純化してしまいました。単純化されすぎているという指摘もありますが、学校教育に関する限りは、教育の全体が体系化されていると思うのですが、学校教育をも含めた教育全体を考えてみますと、どうもそうではありません。あまりに学校教育が体系化してしまったのですから、先ほど申しましたように、教育とは学校教育である、つまり、教育は若いうちに、実社会に出る前に、実社会に出て活動するためのものが教育なのだという意識が非常に強くなっているように思います。このことがいま、改めて反省されているのではないのでしょうか。

これはただ学校教育だけの問題ではなくて、日本の社会構造にもつながってまいります。すなわち、学校教育は社会に出る前の準備をするものであり、社会のほうは採用するときには新卒者を採用する。その新卒者を中高校卒で採用するか、大学卒で採用するかによって、学歴社会ともつながってくるというようなことになる。企業のほうはあとは企業内教育でやるということでありまして、それが終身雇用とつながることになります。この学校教育は完成されたものであり、教育はそこで終わりということが日本の社会全体の構造にかかわっている点が、いま見直されているのだらうと思うのです。

なるのではないかと思います。

それから、大学にありまして、立教大学の法学部が始まりました。社会人に特別の枠を定めて入学をさせるということがあります。聞いてみますと、これは非常に成功しているようでございます。すべての学校がやって成功するかどうか、これにはいろんな難しい問題があります。入試の問題をどうするか、講義の中に社会人という社会的経験を経た人が入って、若い人と一緒になってうまく行くだろうか、あるいは、特にあとでも問題になります。社会人が再教育を受けて、ことに立教大学の場合は学部でありますから、四年間の教育を受けて社会に帰って行くとき、いったいうまく社会に受け入れられるのだろうか。いろんな心配がありますが、しかしとにかく今のところ、社会人の入学という制度が成功しているのを見ましても、やはりこれは従来の学校教育観を崩していく傾向が現れているのではないだろうかと思えます。

あるいはさらにもっと上の段階では、大学院に学部を卒業したあとの二年の修士課程がありますが、これは何も研究者養成機関ではない、もっと多様な目的に応ずべきだ、という考え方に立って設置基準が作られました。なかなか日本の大学は従来のやり方を変えないのですから、受け入れてくれるところが少ないのですが、しかし徐々にそういった新しい修士課程、つまり職業人を養成するための修士課程が現れて

います。これには将来学者になるわけではないけれども、高度の職業人のために修士課程に入ろうという人もいますし、またかなり多くは、一度社会で学んで仕事をしてから自分の勉強をもっと大学院レベルでやりたいということで、つまり社会で活躍した人が再び大学に戻ってきて修士課程に入ってくる。そういう試みが次々と出てきているように思います。筑波大学、埼玉大学、あるいは慶応大学などの修士課程の試みはそういうもので、私はその将来を非常に注目しているわけでございます。

とにかくそういった形で、学校教育のなかでもだんだん生涯教育に眼を向けてきている面が、まだ、わずかではありますが出ています。そこで、今まで生涯教育というと社会教育だと考えられていた面もなかったわけではないと思いますが、家庭教育、学校教育、社会教育全体を含めた生涯教育というものをこれから考えることになり、そしてその考え方によって教育というものの全体を統合して行くことが必要ではないかと思えます。

文部省でも、生涯教育を考える場合には、あまり縦割り行政にならないようにして考えて行く必要があるだろうと思えます。さらには、文部省だけではなく、各省庁が連携して生涯教育を切り開いていかなければならないのではないかと。たとえば労働省がやっております職業訓練所との関連などを当

然考えねばなりません。さらには国家の機構を超えた企業内教育などを含めて生涯教育を考えていく。そうなりますと文部省だけではなくて、日本のおよそ生涯教育に関わるものを総合していく。そしてこれがわが国の教育体制に、より好ましい影響を与えていくのではないのでしょうか。

そして、こういうことができるのは、まずもって地域社会においてではないかと思うのです。国全体でやるうとしますと難しい面がある。国がいろんな点で助成をしたりすることは必要ですが、やはり地域社会がそれぞれの地域社会の特色に応じながら教育を統合していくという試みを、私としては期待したいのであります。

生涯教育の核づくり

それから第二に、このような総合的な生涯教育が効果的であるためには、やはり地域社会に生涯教育のセンターといえるものを作ることが望ましいのではないかと思います。公民館などの社会教育施設がますます充実していけば、それがこのセンターの役割りを果たすことができるかもしれません。

また、これは地域における学校の実態を知らない者の意見かもしれませんが、何といっても学校が教育施設としては非常に完備しているわけであります。生涯教育を行うためにも、やはり学校で行うのが教育的雰囲気のもとになされるの

ではないだろうか。

したがって、生涯教育のタイプに応じて、小学校、中学校、高等学校、さらには大学がそれぞれの地域において文化なり、教育なりを含めたコミュニティセンターになることが期待されるのではないかと思います。

ただ、専門家のほうには学校ではなく、公民館が中心になるべきだという意見があります。このへんの判断はできないのですが、これからますます学校開放というものが考えられてくるのではないだろうか。そしてそれが生涯教育のセンターの役割を果たすこともできることがあるのではないだろうか、と考えるのでございます。

大学になりますと、学校開放という点では一番遅れているのであります。「開かれた大学」ということが強く叫ばれなければならないほど、大学は社会との接触が遅れているように思います。公開講座などほとんどんやっておりますが、一番開かれてないのが大学だと、私は大学人として率直に思います。

外国のことはよく知りませんが、アメリカの大学は田園都市にあるものが多いのですが、その町にはたとえば映画館は少ない。演劇などはやってこない。そこでは、たいいて大学のホールなどで映画、たとえば日本映画シリーズ上映などをしたりする。あるいは演劇、音楽会を催し、それは別

に大学関係者だけではなくて、その地域の住民が集まります。つまり大学のホールが住民の楽しみ場になっているのを見たことがございます。

その傾向はますます進んでくるのではないかと。そういう意味では小・中・高校だけではなくて、大学が地域社会の中に溶け込んでいくことが、これから要求されるのではないかと気がするのです。大学もまた、地域社会における生涯教育の一つのセンター的な機能も営むことができるのではないかと思います。

共同意識の醸成

それから第三の点は、そういう生涯教育が進むことが、地域社会の共同意識を高めていくのではないかとという点であります。地域社会の共同意識は、東京などの大都会ではほとんどなくなってきたといっているかと思えます。

また農漁村の地域でも、過疎が進み人が少なくなってきた。だんだん地域社会というものができなくなっていくという状況もあると思うわけです。どうも夏の甲子園の高校野球のときくらいにしか地域の共同意識が高まるのではないようです。

生涯教育を進めていくことによって、この地域の共同意識が強まるのではないかと。それが生涯教育の大きな役割ではない

いだろうか。たとえば年取った方も若い者も一緒になって学習をやる。勉強するというのはただ学ぶ、受け取るだけではなくて、何かその間に参加した人も教えあうことになります。いままでは人を教えたこともないけれども、年取った方は、事柄によっては若い人に自分の経験から教えることができ、それを通じて教える喜びが出てくる。若い人は若い人で、お年寄りに最近の若い人の楽しむ音楽のことなどを話す。それによって、ともに学びともに教えることが生涯教育の参加者としてできるのではないか。それが当然に、地域の共同意識を強めていく、こういう役割りを無視できないのではないかと思うわけでございます。

生涯教育と学校教育との違い

第四に、本来の学校教育と生涯教育というのは教育という点では共通なんです。やはり多少の違いというものはあると思います。その一つは、いま申したように年齢とか、社会的な経験とか、性別とか、いろんなものの区別が全然ない、受ける人が非常に多様であるということであります。

そういった人たちにいろんなニーズがあり、その多様なニーズにに応じて、きめ細かい要求に応じなければならぬ、ということになるかと思ひます。その点も学校教育とは多少違う。学校教育はなんといつても基礎を与えるという意味で

は画一性というどうしても避けられない面があるわけですが、生涯教育はそれとは違うという点が一つです。

それから内容が非常に多彩です。これは生涯教育にどこまで含めるのかにもよりますが、通常考えられているのは、たとえば趣味のようなものもあると思ひます。絵画、書道などがそうです。囲碁、将棋あたりまでが生涯教育に入るのかどうか分かりませんが、そこまでくると非常に趣味的な要素が強くなります。ついで教養の分野があります。これは非常に高度なものもありまして、古典文学であるとか、外国の文学、哲学といったような、高度の教養のものもそこに含まれる。あるいはスポーツもそこに含まれる。スポーツもまた非常に多様なものがあるかと思ひます。さらに家庭の家事に役立つようなもの、これもやはり生涯教育の一面です。職業、技術、そういった職業人に必要な教育も当然含まれます。その意味では生涯教育は非常に面が広いという点が学校教育と比較した特徴ではないかと思ひます。

学校教育もかなり広い線をカバーできますけれども、しかしまいったようなものは、クラブ活動でやるのかは別といまして教育としてはなかなかカバーしきれない。そこには違いがある。

第三に、これも違ひだと思ひますが、学校教育はある程度の強制を伴う。いやな者でもやらせることが必要になるうか

と思ひます。私もスポーツは好きなんです。機械体操は下手だったものです。機械体操を中学時代強制されました。体操の時間はいいやでいしようがなかったんですが、それでも強制されるということになります。

私は強制された中にも学ぶことの楽しさというものはあるかと思ひますが、しかしどちらかというと学ぶことの楽しさがなかなか学校教育からは出てこないという指摘があります。これに受験勉強が輪をかける、ということになるかと思ひます。

この点はやはり、学校教育というものが生涯教育とつながるためには、学ぶことの楽しさというものを学校教育でも教えなければならぬんだ、ということがありましようが、とくに生涯教育の場合には、自由に、自分の好きなことを、また好きな時期にやれる、というわけでありますから、学ぶことの楽しさを与えることができます。これは生涯教育の大きな特徴ではないか。またそれが生涯教育としてやらなければならぬ点だろうと思ひわけでございます。

もつとも、生涯教育ではあつても、やはり教育である以上は基礎をたたき込むということも必要な場合もある。趣味などでも初めの面白くないことをやうて上達するのですが、職業、技術なんかになると、多少強制力を伴うようなこともやらねばならないでしょう。どうも生涯教育というと、講師の

ほうもただおもしろおかしくやるような傾向がある、という気がするんですが、それだけであつてはならない面もあるかと思ひます。しかしやはり学校教育にない自由さというものがある。こういった生涯教育の特徴といったものを伸ばしていく必要があるのではないだろうか。

東京などの大都市では新聞社、放送会社、デパートなどがやっております。いわゆるなんかカルチャーセンターというの、大はやりでございます。それはやはりまいった生涯教育の特徴をよくつかんでいるのではないだろうかと思ひます。いつでも自由に行ける、そして学ぶことの楽しさというものがある、いろんな人とそこでつきあえる、というような趣味教養から職業技術に至るまで、多彩な内容が提供されていることでもあります。

それと同時に、東京などではことに暇のできた主婦は、家にいるより外に出ていくのが好きであります。ただデパートへ買物に行くという主人はいい顔をしない。カルチャーセンターへ行くんだということになると、これはしようがないということになります。そういう意味で、あとでちょっと放送大学の話をいたしますが、放送大学はあんなにカルチャーセンターがはやってるんだから、放送大学をやつたら非常に希望者が多いんじゃないかというんですが、そこはちょっと違ひがある。放送大学のように、家でテレビで勉強すると

いうのではなかなか魅力がないのかもしれない。やはり外に出て行って、しかも新宿とか青山というような中心地に出て行って、そこで他の主婦とおしゃべりをして、帰りには買物していくのが一つの魅力になっているような気がします。しかしともかくそういった企画が非常な盛況になっているのは生涯教育へのニーズをつかんでいるといえます。これから国や地方公共団体が生涯教育を考える場合にも、そういった生涯教育の特徴をつかんだような施策が必要なのではないかという気がするわけです。

解決すべき課題

生涯教育というものは学びたい人がいつでもどこでも学べるということである、ということを示したわけでございますが、先ほど申したように四十代とか五十代の主婦がカルチャーセンターなんかでも多いのであります。放送大学の調査をやりました場合にも、主婦の希望者はかなり多いございました。地域で生涯教育、社会教育をやった場合、どういう人が多いのかわかりませんが、主婦が多いのは、やっと子どもにも手がからなくなり時間がとれた。それからそういう人たちは戦中戦後十分な教育が受けられなかった、ここで新しく学びたいということもあるんですが、そういった学ぶ意欲がある、学ぶ時間もある、そういう人についての生涯教育はそ

れほど苦心がいらぬように思います。

それはある意味では、ほおっておいてもいろいろな機会をつかまえて勉強してくれるわけですが、非常に難しい問題はそうではない人に生涯教育をどうやっていくかということではないか。これからの問題の一つは、そこにあるように思います。

一つは学ぶ意欲があまりない人の、学習意欲をわき立たせるようなことができるだろうか。これは一言にして答えられなくて、難しいと思うのですが、ことにそういう人たちが東京なんかで見えますと、どうも社会的に活躍している中堅の男性に多いのであります。仕事が忙しいせいもありましょう。仕事に疲れて家へ帰ってきたら、ごろんと寝てテレビでも見ようかということになります。そのテレビもNHKの教育テレビなんかを見ているというのはあまり聞いたことがないであります。たいていは娯楽番組をごろんと寝て見ている。奥さんは昼間カルチャーセンターへ通っているというのですから、どうもご主人と奥さんとの間の教養が違っているのではないかとすることも、これは将来の家庭の問題としては心配になりますが、そういった人たちの学習意欲をわきたさせる。これはどうしても国ではだめなんでありまして、やはり地域社会に生涯教育としての魅力のあるものを作って、そういう人たちの意欲を引き出していくということになります。

す。これは非常に苦心のいるところですし、難しい問題ですが、これから解決しなければならぬ問題だと思ふのであります。

それからもう一つは、意欲はあるけれども時間がないという人も多いと思います。そういう人たちに生涯教育をどうするか、ということでございます。中教審は報告の中で、これは新聞などにも取り上げられたわけですが、教育休暇制度というようなものを提言いたしました。これなどは私は必要なものだと思います。イギリスではサンドイッチ教育といいます。これはことに大学院段階なんかでみられますが、大学へ行つて学習し仕事を休む、それからまた職業に帰る、また大学へ行くというようなサンドイッチのようにするような教育がありますが、日本ではなかなかそういう点が難しいと思いますけれども、やはり教育休暇制度というものが、制度化される必要があるかと思ひます。

そういった意欲があるけれども時間がないという人たちが、これをどうするか。これはやはり地域社会における教育に係しておられる人たちの力がなければ、難しいことだろうと思ふわけです。企業との協力、連携、あるいは雇用制度の改善なども重要であります。社会人の再教育を含めた、そういった時間のない人の生涯教育の問題が、これから重要になってくると思ひます。

それから、教育には申すまでもなくハードの面とソフトの面とがございます。この両者を統合して促進することが必要だと思ふのです。断定が間違っているかもしれないませんが、これまで、ことに社会教育の面では、とにかくハードの面を充実させること、たとえば立派な公民館を作ることが、少なくとも政策的には議論の中心になっておりまして、社会教育の方法をどうするか、あるいは内容をどうするか、あるいは指導者をどう養成するかといったソフトの面が多少遅れているのではないか。これは私の間違いかも知れませんが、これからの社会教育はハードの面もむろん重要であります。ソフトの面を考えていく必要があると思ひます。

学校教育の面では、一部には国や地方公共団体の役割はハードの面に集中すべきで、あまり教育内容のようなソフトの面には入るべきではないという意見もございます。私は必ずしもそうは思いません。適正な範囲内においては、国や地方公共団体が、学校教育のソフト面にも一定の關係を持ていくことが必要だと思ひますが、生涯教育の面については、いっそうソフトの面というものについての国の協力といひますか、関与といひのが必要なのではないでしょうか。

もちろんあまり過度に介入しますと、やはりこれは教育でありますから、その活力を減退させるということになります。あるいは画一化、規格化しがちになるということもあり

ますが、しかしこのソフトの面を地域社会が、その社会のニーズに応じながら考えていくという必要がありました。この点についてはやはり教育委員会などの任務が非常に大きいのではないかと、という気がするわけでございます。

最後になりましたが、地域社会における生涯教育にはきわめて困難な面もあるかと思えます。たとえば、第一流の芸術家なんかを呼んで話をしてもらおう、あるいは学者を呼んで話をしてもらおうというようなことは、一回限りの講演ならできないことはないでしょうが、継続的にそういう人を頼んでやるということは、各地方でそれができるといいうわけではないと思えます。

そうなりますと、そういう問題はやはり国がやる。そういう意味では、生涯教育において国と地方公共団体、あるいは地域社会との分担をどうするかという問題が残ろうかと思えます。もちろん、国がやるからといって地方は何もしないでおくというのではなくて、地方それぞれの要求を組み入れながら、国全体でそういう問題を考えていかなければならないと思えます。

放送大学の役割

それに一つの対応をしようとしている面を持つのが放送大学だと思っております。放送大学につきましては、この前

の通常国会では、放送大学学園法案が廃案になってしまったのですが、私は近く学園ができ放送大学が発足するということを期待しているわけでございます。

放送大学は昭和四四、四五年ごろから考えられておりまして、当初はご承知の通り、大学進学率がどんどん高まってきた。しかしそれに応じていい大学を作ることとはできない。したがって正規の大学である放送大学を作って、そういう人たちを受け入れたらどうか、という意見が強くなりました。自民党のほうも非常に賛成いたしましたして推進しました。キャンパスのない大学、紛争のない大学というようなキャッチフレーズもあったことはご承知の通りでございます。

しかし、時代がだんだん変わってまいりました。ご承知の通り、大学の進学率は高まってはまいりましたが、だいたいの頭打ちになりました。そしていまや、先ほど申した専修学校へ行こうという人がふえている状況です。そこでそれほど大学進学者というものを受け入れるための放送大学というものの、重要性がへってきたような気もするわけがあります。

もちろん、高校を卒業したけれども、地理的な理由、あるいは経済的な理由で大学に進めないという人が、放送大学に学ぶという面はございますから、重要だと思えますが、むしろ、といったいいのがあるいは同じ程度に重要なのは、生涯教育としての役割をになう放送大学ではないかと思われま

す。アンケートなんかをとってみましても、高校卒で放送大学でいわば学士の資格を得たい、大学卒の資格を得たいという人もかなりいますが、むしろ同じぐらいに、大学をすでに卒業した人で、大学卒の資格はいらない、しかし放送大学で新しい学問を学びたい、自分が大学で学んだ学問がどう発展しているかを学びたい、あるいは自分は大学で経済学を勉強したけれども、法律学の勉強をしたい、そういう人たちが非常に多いということがわかったわけでありまして。

そういう意味では、放送大学はこれから一面では通常の正規の大学、高校卒の人を受け入れる大学であると同時に、生涯教育、つまり年齢差あるいは職業的なちがいを問わないで学生を受け入れる大学ということの意味があるのではないだろうか。そういう意味がだんだん強くなってくるのではないのでしょうか。

そこでは一流の講師に、それぞれの論題について講義をしてもらうということになります。いまの構想はご承知の通り、教養学部という一学部を置く大学ですが教養学部ですから非常に範囲が広く、人文、社会、自然の各学問分野にわたって幅の広い講義が準備されているということになります。そして年齢、職業、学歴などのちがいにかわらず、高等教育を受ける機会が与えられるということになります。もちろん、放送大学にもいろいろ問題がございますでしょう。

法律的な問題もあり、教育学的にいったい放送で大学教育ができるのか、というような問題がありますが、それは別といたしましてもこれが成功するためには、教育でありますから放送しつ放し、送りつ放しではだめである。やはりそういった学生が主体的に学習することを考えなければならぬでしょう。

そこで地方にスクーリングを行う学習センターを置いて、そこへ学生が来て友だちとも一緒にになり、また教師が来まして指導することになります。そういう学習センターが各地域に置かれる。この学習センターが成功するかどうか、私は放送大学にとってもきわめて重要ではないかと思っているわけでありまして。

いい講義を放送で流すということだけならば、これも難しいんですがそんなに困難ではない。むしろ各地域における学習センターの問題が重要ではないだろうか、という気がするわけでありまして。それにはまた各地域の教育委員会や関係者の方々のご協力を得なければなりません。そしてまたそれが各地域において、地域の能力の範囲を超えた生涯教育というものを実施する役割になってくるのではないかと、という気がするわけでございます。私の話はこれで終りたいと存じますが、何かご参考になれば幸いです。

(本稿は、昭和五十四年度北海道・東北地区文教施策連絡協議会における講演を基にしたものです。)

中村岳陵 気球揚る

中村岳陵は、いわゆる美人画描きの画家ではない。画業の中心は花鳥、風景であった。稀に女性を描く場合でも、風俗への関心のほうが強く、けっして美人画に仕立てようとはしなかった。たとえば代表的作例に「都会女性職譜」（昭和八年）があるが、これはエレベーターガール、女手品師、カフェーの女給など当世東京女性風俗を描きつけたものである。「気球揚る」は第六回日展に出品された作品で、時代を明治二〇年前後の鹿鳴館時代におき、洋装の貴婦人、双眼鏡、気球など当時のもつともモダンな風俗を描いて、文明開化の華やいだ、そして意気盛んな時代の鬱陶気をノスタルジアをこめて表わしている。

岳陵は明治二三年静岡県下田市に生まれた。明治四五年東京美術学校日本画科を卒業、院展に出品して、大正四年同人に推された。その後は院展、ついで帝展・新文展・日展などに習熟した技法に基づく清新な感覚の作品を発表し、昭和三七年文化勲章を受章した。日本で気球を揚げたのは、明治二三年イギリス人スペンサーが最初だといわれている。それは丁度岳陵が生まれた年に当る。戦後のこの時期に岳陵がどうしても鹿鳴館時代の風俗を描く気になったのかよくわからないが、日本の新しい出発と、自らも永年所屬していた院展を脱退し、心機一転生まれ変わろうとする心意気を表明したとも考えられる。

（岩崎吉一）

編集後記

▽昭和四十七年九月、時の田中首相の訪中により、日中国交正常化が実現されて以来、両国間ではさまざまな分野での交流が急速に活発化しており、ます。文教の分野でも、特に留学生の受入れに象徴されるように両国間の当面する課題は少なくないと思われまふ。▽今月は、日中両国間の問題をどのように解決すべきかを考える一助として、「中国との教育・学術・文化交流」を特集しました。

▽平塚先生には、我が国の教育が今後どのように、国際化に対応していくべきであることを示唆していただき、青井先生には、中国の教育の現状を中心に述べていただき、また久松先生には、留学生交流の経緯をまじえつつ、交流に対するお考えを論及していただきました。

▽座談会では、中国の教育、学術、文化の事情を最近視察してこられた方々にお集まりいただき、今後の両国の交流を促進する上での問題点、対応策について論議いただきました。実際に留学生を受け入れられる各大学等の関係者の方々とはもとより、広く御一読いただきたいと思ひます。▽次号は、「諸外国の文教政策」を特集します。

ME J 61 月刊 「文部時報」 2月号 第1233号

文 部 省

昭和55年2月5日 印刷
昭和55年2月10日 発行

著作権
所 有

発行所 株式会社ぎょうせい

本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)

(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)

電話 東京 (268) 2141 (代表)

振替口座 東京 9-161番

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 200円 (〒33円)

年間購読料 2400円 (〒共)

* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます

* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店にお願いします